第3問　古文

●出典

『源家長日記』

●作者・作品紹介

鎌倉初期に成立した日記。後鳥羽上皇に仕えた源家長（？～一二三四）が、建久七年（一一九六）から承元元年（一二〇七）までに、宮中で見聞した出来事を、仮名文で書いたものである。その成立は明確ではないが、承元四年（一二一〇）から承久三年（一二二一）の間であると推定されている。

内容は、『新古今和歌集』の撰進下命、『新古今和歌集』の編纂、竟宴、切継など、『新古今和歌集』撰集の経過や、藤原俊成、寂蓮、源通具、藤原定家、鴨長明、藤原良経など歌人の消息が語られている。

問題文は、『新古今和歌集』の編纂と竟宴について語る部分から出題した。助字の処理や句読点など、受験生が読みやすいように配慮して改訂した部分がある。

●本文解説

まず、冒頭で、四月に竟宴が開催されたことを述べる。その後、いったん過去に戻って、前年の十月以来続いた『新古今和歌集』の編纂作業を時系列に従って回想しながら、和歌に打ち込む後鳥羽院に対して賛嘆した後、再び竟宴の様子の描写に戻っていくという構成となっている。

●設問解説

問1　古語・文法に関する設問。

(ア)「心もとなし」は、「心」に「もとな（むやみに…する）」が付いて形容詞化した語とも、「心」に「許」と「無し」とが付いて成立した語とも言われる。いずれにしても、むやみにはやる心を抑えきれず、落ち着かない気持ちを表す。「こうあってほしい」という願いと現実とが一致していない状態や、その時の心理状態を表すので、「待ち遠しい」「じれったい」と訳すことが多い。これに該当する選択肢は、①「じれったく」、④「もどかしく」である。①・④のどちらかに絞るためには、「おぼしめし」に注目する。「おぼしめす」は「思ふ」の尊敬語で、「お思いになる」の意。①は「お思いになって」と尊敬語で訳してあるが、④は「思いまして」と丁寧語で訳してある。したがって、正解は①となる。

(イ)「ところせし（所狭し）」は、心理的・空間的な狭さを表す語で、「窮屈だ」と訳す。「ところせし」の語義が分かっていれば、正解が③であることは明らかだろう。

(ウ)「んずる」は、推量の助動詞「んず（むず）」の連体形であり、「…だろう」と訳す。「んず」を打消のように理解して、「…ないだろう」と訳すのは、典型的な誤りであるから、②「ないだろうよ」、③「ないかもしれない」は誤りである。また、「ない」と訳していなくても、①「あるかもしれない」は推量である「んず」の訳から外れているので、これも誤り。⑤の「あるのだろうか」は推量で訳してあるものの、「か」という疑問表現に当たる語はない。したがって、正解は④。直訳すると、「耳はあるだろうよ」となる。その「耳」とは「風流な話を聞く耳」で、『新古今和歌集』の編纂が終われば、風流な話を聞く心のゆとりが出来るが、今はそんな余裕はないと言っているのである。

品詞分解

名詞	ラ行変格活用動詞「あり」の未然形	推量の助動詞「んず」の連体形	終助詞
耳	あら	んずる	ぞ

問2　「る」の識別の設問。正解は②。

助動詞の中で「る」という活用形を持つ語は、「り」（ら／り／り／る／れ／れ）と、「る」（れ／れ／る／るる／るれ／れよ）がある。「り」と「る」は、上に来る動詞の語尾の音によって見分ける。「り」はエ段音に付く助動詞なので（「り」は、サ変動詞の未然形、四段動詞の已然形に接続するが、サ変の未然形も四段の已然形も、「せ」「書け」というように、共に語尾がエ段音になる）、エ段音に付いている「る」は助動詞「り」であると考えることができる。一方、「る」はア段音に付く助動詞なので（「る」は四段動詞・ナ変動詞・ラ変動詞の未然形に接続するが、四段・ナ変・ラ変の未然形は、「書か」「死な」「あら」というように、共に語尾がア段音になる）、ア段音に付いている「る」は助動詞「る」と考えることができる。

覚えよう――「る」の識別のポイント

エ段音に付いている「る」→完了・存続の助動詞「り」
ア段音に付いている「る」→受身・可能・自発・尊敬の助動詞「る」

波線部bは、「撰らせ給へるさま」というように、「へ」というエ段音に付いているので、助動詞「り」の連体形ということになる。「り」は完了・存続の意味を持つ助動詞なので、該当する選択肢は②⑤ということになる。波線部cは、「書き出ださる」というように、「さ」というア段音に付いているので、助動詞「る」の終止形ということになる。「る」は受身・可能・自発・尊敬の意味を持つ。ここでは、後鳥羽院が歌を「御覧じて」「書き出ださる」となっているので、尊敬と理解するのがよい。該当する選択肢は、①②となる。以上のb・cの説明を満たしている選択肢は、②となる。ちなみに、aはラ行下二段活用の動詞「漏る」の連体形「漏るる」の一部であり、「漏るる」「漏るれ」のように、ウ段音に付く「る」「れ」は、動詞の連体形・已然形語尾であるのが普通。また、dは形容動詞「豊かなり」の連体形「豊かなる」の一部である。

傾向を知る―センター試験

センター試験の文法問題は、識別問題と敬語法が主たる傾向となっている。識別では、「に」「る」「れ」「なり」「ぬ」「ね」など、異なる助動詞で共通する語形を持っている語について特に注意したい。

センター古文文法
は覚えることが少なくて
得点アップにつながる!!
とやればできる。
かせごう。

問3　筆者の考えに関する設問。正解は⑤。

「ことわりなり」とは「理にかなっている。当然である」という気持ちを表す。この設問は、何が当然であるのかを、本文から読み取ることを求めている。まず、「これ」の指示内容は、傍線部Aの直前の「『試みよ』と仰せられて、部類したるを三巻取り出だされて、『上を読め、下をば、みな仰せられん』とて、一巻を引き隠して上を読み侍れば、下は聊かに詰まらず」を受けている。つまり、後鳥羽院が『新古今和歌集』の草稿に載せられている和歌をすべて暗記していることを指している。編纂作業の中心にあったとしても、二千首近い歌をすべて記憶しているなどということは、現代人には考えがたいことである。これを筆者の家長は「ただ昼に三と御覧じたることだに、つゆ忘れさせ給はず。まして度々『撰らせ給ふ』とて推し出しをおぼしめしわけて、いづれか御心の底にとどまらざるべき」と続けて、あり難いこととして賞嘆している。後鳥羽院は、ただ昼に三回ご覧になったことでさえ、全くお忘れにならない。まして何度も「お選びになる」とおっしゃって歌の推し出しを判断なさったのだから、すべての歌が記憶の底に残っているのだ、と言っているのである。この内容を述べている選択肢は、「後鳥羽院が『新古今和歌集』の歌をすべて記憶していたこと」を「院はもともと記憶力が優れているのに加えて、撰歌のために何度も歌をご覧になっていた」ことを理由にして説明している⑤ということになる。

【その他の選択肢】

①②③は、後鳥羽院が『新古今和歌集』の歌をすべて暗記していることに対して「ことわり」と言っていることは示していないので、誤りとなる。④は「後鳥羽院が『新古今和歌集』の歌を暗誦できることを隠さなかった」とあり、後鳥羽院の『新古今和歌集』の暗記を話題にしているが、選択肢の後半部分の「隠さない性格」を理由にしている点が、本文からは離れてしまっている。

問4　和歌の表現を問う設問。正解は②。

傍線部Bの「逢ふと見て」の歌と、その本歌となった「秋の夜も」の歌について、説明を読みながら正誤を判断する力を求めている。問4は、「適当でないもの」を選ぶので、間違えないように注意すること。選択肢①―⑤を見ると、明らかに不適当なものは②である。②は「秋の夜は短い」としているが、「秋の夜」は「長い」ものとして和歌ではうたわれている。短い夜は「夏の夜」である。②は「秋の夜は長いのでゆっくりと逢えると思っていたのに、いざ逢ってみると逆に時間がとても短く感じられたというもので、恋人にやっと逢えたのにすぐに別れなければならない嘆きをうたったものである」とすれば、正しい説明となる。

【その他の選択肢】

⑤にあるように、「本歌取り」とは、「有名な古歌の表現を取り入れることによって、表現や情緒に奥行きを与えて、新しい歌的世界を作り出す技法」である。ここでは、小野小町の歌を本歌として、表現や情緒に奥行きを与えようとしているのである。その奥行きとはどのようなものであるかというと、①にあるように、「逢ふと見て」の歌は、出会いを夢の中の出来事であるとうたうことによって、④にあるように、「目を覚ますと何も残らない夢のはかなさ」と「恋のはかなさ」とを重ねている。小野小町の歌は、「やっと恋人に会えたのに、すぐに別れなければならないのは悲しい」と、恋の始まりの心情を詠んでいるのに対して、「逢ふと見て」の歌は、そのはかない逢瀬を夢の中の出来事と見て、またその夢を「忘れがたみ」と表現することを通して、もう逢うことのない昔の恋人との出会いを回想する歌となっている。つまり、「逢ふと見て」の歌は、恋の終わりの歌なのである。恋の終わりの歌とすることによって、出会った喜びよりもはかなかった逢瀬がいつしか消えてしまったことを、振り返るような内容となっている。「秋の夜も」の歌は出会いの夜の一点をうたうのに対して、「逢ふと見て」は恋愛の始まりから終わりまでの長い時間をうたっている。これが、本歌取りによって作られた表現・情緒の奥行きなのである。

なお、③にあるように、小野小町は六歌仙の一人として有名である。六歌仙とは『古今和歌集』の仮名序で取り上げられた歌の名人たちで、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主である。

傾向を知る―センター試験

センター試験では、和歌の問題はほぼ毎年出題される。特に、最近は和歌の表現についての出題が続いている。歌の中で詠まれている景物が何の比喩であるのか、というような問題や、掛詞・序詞などの修辞法についての問題も出題されている。和歌の表現について、理解しておきたい。

問5　本文の内容に関する設問。正解は①。

①は、「五人の撰者がおのおの撰しあげて後、ことごとく御覧じ通して、その中にさもあるを叡慮ありて、左近将監清範に書き出だして後、それをまた御覧じて三度まで書き出ださる」と対応している。後鳥羽院は、まず、五人の撰者たちが選んだ歌を見て、その中で歌集に載せるにふさわしい歌に印を付け、さらにその中からよい歌を選んで印を付けるという作業を、三度まで繰り返したのである。

【その他の選択肢】

②は、「五人の撰者たちは、歌の内容を議論するかたちで問答を行い、後鳥羽院が選ばなかった秀歌を付け加えた」とあるのが誤り。このような内容は本文中に記されていない。撰集作業の中心は後鳥羽院であり、五人の撰者たちの役割は院の補助員である。

③は、「一人の蔵人が、院に対して、詩歌よりも政務の方が大切であると繰り返し諫言した」が誤り。蔵人は「よにことしげきことの、しかるべき大事にはあらざるを（あまり重要でない政治の用件）」を院に奏上したのである。

④は、「今までの勅撰和歌集にならって政治的な歌は選ばれなかった」が誤り。「すべてこの勅撰には、由ある歌などを捨てられず、ただよき歌などを先とせり」とあるように、まず歌の善し悪しを第一にして、内容については、それを理由として歌集に入れないということはなかったのである。

⑤は、「琵琶が上手であるということだけで、竟宴に参加が許された人がいた」が誤り。「この集に入らぬ人の、竟宴に歌を奉れる、つきしろふ人侍りき」とあるのは、『新古今和歌集』に歌が選ばれなかったのに、竟宴で歌を院に奉ったことに対して、人々は指をさしたのである。また、そのような非難を受けた理由については本文のどこにも記されておらず、「琵琶が上手であるということだけ」が理由であったとすることはできない。

問6　全体の構成を考える設問。正解は③。

③の「四月に竟宴が開催されたことを冒頭に述べたうえで、いったん過去に戻って、前年の十月以来続いた『新古今和歌集』の編纂作業を時系列に従って回想しながら、和歌に打ち込む後鳥羽院に対して賛嘆した後、再び竟宴の様子の描写に戻っていく構成となっている」が正解で、はじめに「竟宴」が行われたことを述べ、次にその竟宴に至るまでの過程を述べていることが読み取れているかを、この設問では問うている。古文では、このようにまず結論を述べた後、そこに至る説明を記すような書き方もあるので、注意する。

【その他の選択肢】

①の「和歌所で行われた二度目の竟宴」、②の四月の「中書きの完成を祝う竟宴」と「完成を祝って開催された歌合わせや竟宴」があること、⑤の「再度竟宴が行われた」は、いずれも竟宴が二度行われたことになっているのが誤り。

④は、「政治の不興に目を向けずに和歌に没頭する後鳥羽院の姿勢に対する批判」を述べているとする点が誤り。本文では、後鳥羽院を賛嘆する表現はあるが、批判する表現はない。後鳥羽院が蔵人に対して「この頃は、かやうのことの耳にも入らぬなり。新古今の沙汰果てて、耳はあらんずるぞ」とおっしゃったことに対しても、家長は「やさしく承りき」というように「風流である」と賞嘆している。

●現代語訳

『新古今和歌集』の編纂作業が終わって、この四月に竟宴がございました。（後鳥羽院はいつになったら歌集が完成するのかと）じれったくお思いになって、まず中書き完成の段階で竟宴を挙行された。

去年の十月頃から、和歌所に寄人たちを呼び集めなさって、午前八時頃から日が暮れるまで、手も疲れて力が入らなくなるほど、ある者は書き、ある者は切り継ぎをして、膝を崩す余裕もない。全体として、（院が）この歌集の歌をお選びになった様子は、本当に毛を吹き分けて小さな傷を探し出すように、綿密なものになさった。五人の撰者が、（まず）それぞれ（秀歌を）選んで（院に）お選び申し上げて、その後、（院はその歌集を）すべてご覧になって、その中でよいものに印をお付けになって、（その院の印を付けた秀歌を）左近将監清範が書き出した後、それをまた（院は）ご覧になって、三度まで書き出しなさる。本当に人柄の高いか低いか、賢いか愚かであるか（などの歌以外の基準）に拠らないで、ただ歌の出来を第一として、かえって歌に入らないような人々や、山寺の法師などについてまで、この和歌の道に巧みな者は漏れはないでしょう。（院は撰歌作業に当たって）その五人の撰者が別々に印をつけて書き出した和歌を取り寄せて、一度に精査なさったので、（和歌所が）これほど窮屈な感じになったことはございませんでした。

（院は）すべて二千首に及んだ（『新古今和歌集』の）草稿を何度もご覧になって、繰り返してお調べになったので、みなこの（草稿に載せられていた）歌を暗記なさっていらっしゃったことは、めったにないほどすばらしいことだと（私たちに）思わせなさるほどでいらっしゃいました。しかしながら、本当にすべて暗記なさっているとは（私たちは）お思い申し上げておりませんでしたが、（院は）「試してみよ。」とおっしゃって、分類した草稿を三巻取り出しなさって、「上の句を読め、下の句を、（私は）全部おっしゃろう（言おう）」とおっしゃって、（私たちが）一巻を（院に）見えないようにして上の句を読みますと、（院は）下の句をすべてお答えになった。これは当然あることでございます。ただ昼に三回ご覧になったことでさえ、（院は）全くお忘れにならない。まして何度も「お選びになる。」とおっしゃって歌の推し出しを判断なさったのだから、どれが記憶の底に残らないだろうか、いや、すべての歌が記憶の底に残っているのでございます。

（『新古今和歌集』は）昔も例がないような歌集でございますので、そうはいってもやはり（選ばれないのはおかしい）と思っている歌人たちの歌が漏れて、（その歌人たちは）思い思いの知り合いを尋ねて、ある者は歌を詠んで添えたり、（またある者は）すばらしい言葉を尽くして嘆願状を書いたりして、いろいろなところからお訴え申し上げている様子は、本当に雨の降る様子よりも頻繁である。

最近、（院は）政治も少し遠ざけなさって、大事なことはこの歌のことばかりでございます。（政治を取り仕切る）蔵人も役人も、「困ったことだなあ。」と申し上げていました。ある蔵人が、本当に大したことではなくて、しかもそれほど大事ではない（政治的な）用件を、繰り返し申し上げましたところ、（院は）不快にお思いになって、「最近は、このようなつまらない政治の話は耳に入らないのだ。『新古今和歌集』の撰集作業が終わったら、風流な話を聞く耳を持つゆとりはあるだろうよ。」とおっしゃっていましたが、それが風流なことだと（私は）お聞きしました。

そのようにして撰集作業も終わり頃になったときに、撰集に協力した者たちはそれぞれ名残を惜しんで、身分の組に分かれて歌を詠んで歌合わせをしました。勝敗をあれこれ言うときには、（院が）ご覧になってご判断なさった。家隆朝臣が、「[illegible]の」と、今回の歌合わせで詠んで、そのまま『新古今和歌集』に入りました。

決してこの勅撰和歌集においては、欠点がある歌なども（それだけの理由で）お捨て

つづき

になることもなく、ただよい歌などを第一とした。それは、（『古今和歌集』以来の）古い歌の伝統を継承しようと考えられていたからであります。家隆朝臣の歌に、

あの人と逢う夢を見て、何をするでもなく夜が明けてしまったよ。はかない夢だけが、はかない恋の忘れ形見であるのだなあ。

この歌も難点がございます。この他の歌にも、やはりございましょう。思いつくものばかりを、書き載せました。

その竟宴において、管絃のお遊びがございました。管絃のお遊びが終わって、それぞれ和歌を詠む。この『新古今和歌集』に入らない人が、竟宴において歌を奉ったことに対して、つつき合って不満を表す人がおりました。それにしても、管絃のお遊びにおいて琵琶がどのようにも調子を合わせられなかったのは、それほど音楽の道に暗い人がどのような選びであったのでしょうか。（この人は）院の御前で琵琶をお弾きになることも何度もございました。初めてのことならば、気後れしてもよいことでしょう。（初めてでないのにここまで気後れしてしまうのは）ただごとではないでしょう。そのおのことは、例が少ないことなので、聞いていた人々は誰も見えないほど拝んで困っていました。（その人々は、琵琶のことを）どのようなことだと言っていたのでしょう。（琵琶を弾いていた人は）それが縁になって、今は琵琶を手に取って見ることもしないと、お聞きしています。

今回の解答番号

第3問（50点）				
1 (ア)	21	1		5
1 (イ)	22	3		5
1 (ウ)	23	4		5
2	24	2		6
3	25	5		7
4	26	2		7
5	27	1		7
6	28	3		8
小計				点

大問	設問	正解	正解率	50%　100%	誤答パターン	ノーマーク	A 60以上	B 60~55	C 55~50	D 50~45	E 45未満
3	21	1	49.2	[illegible]	3-(28.3) 4-(9.7) 2-(8.1)	0.9	76.1	62.6	54.1	44.9	28.2
	22	3	39.0	[illegible]	1-(33.1) 2-(13.6) 4-(7.8)	1.0	64.1	47.3	39.2	32.8	25.2
	23	4	33.3	[illegible]	2-(31.2) 3-(12.1) 1-(12.0)	1.4	56.0	41.6	34.4	28.0	19.7
	24	2	48.4	[illegible]	4-(20.7) 3-(17.0) 1-(6.7)	1.1	78.1	63.8	53.5	42.5	25.8
	25	5	51.5	[illegible]	4-(20.1) 3-(13.9) 2-(7.6)	1.2	87.7	73.0	59.2	44.2	22.1
	26	2	49.9	[illegible]	3-(15.9) 4-(13.8) 1-(9.9)	1.6	78.1	63.8	53.7	44.4	29.4
	27	1	33.1	[illegible]	4-(19.7) 2-(18.4) 3-(17.6)	1.6	57.8	41.7	34.4	27.4	18.2
	28	3	50.5	[illegible]	2-(20.7) 4-(10.1) 1-(8.7)	3.7	82.9	66.9	55.1	43.5	26.9

ノーマークはしないように。